

第127回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2020年11月9日(月) 郵送句会

兼題「霜」「さざんか」

- 川井素山 ○渡し舟一夜の霜のしづく跡
十三湖鋤簾重たき寒蜩
夜半の湯に己が桶音雪の宿
牡蠣剥く手止めぬ女の嫁自慢
- 保井寶正 ○霜晴れや和服にしやれて黒長靴
鮫鱈や海のフォワグラどぶ汁に
山茶花や帯の干したるわが書齋
いつとなく老を忘する小春空
- 佐久間喬 ○峰の星比叡の寺に霜きびし
鳥来たり山茶花の垣盛りなり
屋敷門主なき家に山茶花散る
眠る街無色透明氷張る
- 丸山酔宵子 ○風もなし音も聞こえぬ霜の声
オリーブの葉を輝かすフルムーン
紅葉こうようが遅いと阿弥陀振り向ひて
声明や苔に滲み入る三千院
- 吉田啓悟 ○水澄みて心の奥の奥へ行く
身に入むやたんすの隅のパスポート
初霜や二人用ベンチにひとり
小春日や洗濯紐の赤蜻蛉
- 青木英林 ○さざんかの垣根挟んで隠れん坊
お十夜も世相映して僧一人
大根干す眩しさ並ぶ軒の下
凧に身をすくめたる木立かな
- 山本草風 ○早霜や季節二つに分けるかな
冬隣炊事する手は常ならず
夭折の菊香にむせぶ遺影かな
禪の少年白し宮相撲

渡辺鯨波 ○山茶花や幼児らの乗るリヤカー行く
さざんか散る薬学部へと抜ける道
インバネス闊歩してゐる文士村
ダイヤモンドダスト呪文解けました

後藤克彦 ○三密を避けて並ぶや菊人形
山茶花や散る細道に招く猫
山門や伸びに伸びたる烏瓜
蜘蛛の糸絡む先にも紅葉あり

原 晶如 ○御浚ひの能楽堂に霜の朝
ぬくぬくと肌着の色に枇杷の花
墳丘のねむりは深し冬の蝶
侘助のひらき加減を愛ほしみ

佐久間たか子 ○小春日に墓石みがきて春の如
大霜の山肌極む八ヶ岳
山茶花を掃く地^{じしめ}湿りや日本晴れ
霜晴に棚田^{まぼゆ}目映くどこまでも

次回「萩句会」

日時 2020年12月14日（月）

郵送句会

兼題『羽子板市』または『闇鍋』一句

当季雑詠 三句